

幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査

佛教大学教育学部 平 田 豊 誠 京都ノートルダム女子大学 小 川 博 士

抄 録

「虫」は日常用語であり、科学用語の「昆虫」に対して、きちんとした科学的定義がなされているわけではない。また、「動物」は科学用語としての定義はなされているものの、定義本来よりも日常用語として使用されている。そのため、人によっては、「虫」や「動物」の意味する範囲が異なっていると考えられる。そこで、本研究では、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、「虫」や「動物」ととらえている範囲を明らかにするとともに、就職後に子どもたちに提供しようとする動物関連の活動の意欲についての調査を行った。

その結果、虫のイメージは、86.3%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物（9.4%）や節足動物以外（3.6%）、まれに脊椎動物の一部（0.7%）が含まれることが明らかとなった。また動物のイメージは、哺乳類が89.9%とほとんどであり、続く鳥類は7.4%であることが明らかとなった。また、虫嫌いの学生が多くいる現状の中、幼児教育現場で働くにあたって、虫や動物の好き嫌いにかかわらず、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みを行っていく意識のあることが明らかとなった。

Key Words：幼児教育，大学生，虫，動物，科学用語

I はじめに

「虫」は日常用語であり、科学用語の「昆虫」に対して、きちんとした科学的定義がなされているわけではない。また、「動物」は科学用語としての定義はなされているものの、定義本来よりも日常用語として使用されている。そのため、人によっては、「虫」や「動物」の意味する範囲が異なっていると考えられる。

虫に関する意識調査においても、虫を「ムシ」または「虫」とし、生物学上の分類にはこだわらず、子どもたちが日常「虫」と呼んでいる、身近にみられる昆虫類やカタツムリ、ダンゴム

シなどを含めた小型の無脊椎動物をさすものと説明されている（例えば、落合，1996，1997，日高，2004，2005，山下・首藤，2005，木村・野崎，2016）。これらの虫の捉え方には定義という形での普遍性は認められず、子どもたちが日常「虫」と呼んでいるものとの合意の上に、虫に関する意識調査・研究がなされている現状がある。またこれら日常用語として用いられた虫について、好き嫌いに関する研究が多く報告されている（例えば、落合，1996，1997，1998，日高，2004，2005，田中，2015，木村・野崎，2016）。さらに、一般的な虫ではなく昆

虫という定義のもと意識調査・研究がなされた報告も見受けられる(例えば、久留飛, 2004, 藤田ら, 2007, 佐伯, 2008)。逆に、動物飼育の経験を問うた場合には、動物という用語を用いた調査にもかかわらず、小動物や昆虫も回答されている(例えば中村ら, 2002, 山下・首藤, 2005, 栗原・野尻, 2008)。以上のことから、虫と動物の用語の科学的な使い分けがなされているわけではない。あくまでも、一般的に日常用語としてイメージする「虫」や「動物」という用語として調査研究に用いられてきた現状がある。しかし、このような用法には、科学的な定義による共通認識がなされておらず、調査者と被調査者間に認識のずれが生じている可能性がある。そのためこれらの認識のずれの幅を明らかにするとともに、ずれが生じている実態を把握しておく必要がある。

また、動物との関わりについては、幼稚園教育要領解説(文部科学省, 2008)や保育所保育指針解説書(厚生労働省, 2008)、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(内閣府, 文部科学省, 厚生労働省, 2014)にも取り上げられており、動物飼育という具体的内容を基に重要視されている。初等教育における動物との関わりについては、小学校学習指導要領解説生活編(文部科学省, 2008)、小学校学習指導要領解説理科編(文部科学省, 2008)においてその必要性が述べられている。これらの中で、小動物という記載は以下のような実態がある。幼稚園教育要領解説では「小動物と一緒に遊んだり」という表現がなされており、その出現数は1件である。保育所保育指針解説書では「親しみの持てる小動物」のように記載され、出現数は5件である。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説では、幼稚園教育要領解説と同様に「小動物と一緒に遊んだり」という表現がなされており、その出現数は3件である。小学校学習指導要領解説生活編では「第1学年でも第

2学年でも飼育と栽培の両方を行う方法がある。また、例えば、小動物を育てながら一緒に野菜などを栽培して、それを小動物のえさにする方法もあろう」とあり、出現数はこの文内の2件である。小学校学習指導要領解説理科編には小動物との文言は出現していない。

そこで本研究では、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、これらの学生が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることを目的とした。また、就職後に子どもたちに提供しようとする動物関連の活動の意欲についても明らかにすることを目的とした。

II 調査方法

1 対象及び時期

大阪府内の私立大学教育学科に在籍する学生のうち、幼稚園教諭免許、保育士資格取得を志望している学生(1年生62名、女子54名、男子8名)を対象に、2016年4月下旬に調査を行った。対象者62名全員から回答を得た。

2 調査の方法と質問項目

調査は質問紙法を用いて行った。本研究で用いた質問項目は次頁枠内の通りである。

質問1) および2) では、「15書いてください」とだけであり、出題者は補足の説明をせず、記述する内容の判断を回答者に任せることとした。日高(2005)では、イメージする虫の具体的な名称を最大3種類まで書くように求めている。そして、虫好き、虫嫌いのそれぞれの傾向群に属する回答者がイメージする虫の具体的な名称についての検討を行っている。今回、15種類という多くの名称の回答を求めたのは、日常用語として用いられた場合に人によって異なった捉え方をしていると考えられる「虫」及

- 1) 「虫」を15書いてください
- 2) 「動物」を15書いてください
- 3) 虫は好きですか、嫌いですか
1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらでもない 4 どちらかといえば嫌い 5 嫌い
- 4) 動物は好きですか、嫌いですか
1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらでもない 4 どちらかといえば嫌い 5 嫌い
- 5) あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか
- 6) あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか
- 7) 学校園に就職後、自身の担当の教室で動物を飼うことについて
1 飼う 2 飼うかも 3 飼わないだろう 4 飼わない
理由があれば教えてください
- 8) 学校園に就職後、自身の授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行うことについて
1 行う 2 行うかも 3 行わないだろう 4 行わない
理由があれば教えてください
- 9) 虫を今現在、触(さわ)ることについての意識について
1 平気で触ることができる 2 何とか触ることができる 3 どちらでもない
4 極力触りたくない 5 絶対に触りたくない

び「動物」の範囲を明らかにするためである。

質問3) および4) では、「虫」及び「動物」に対する好き、嫌いについて5件法での回答を求めた。人によって虫や動物の捉え方が一律に定義されたものではないと判断したため2件法ではなく5件法とした。

質問5) および6) では、虫や動物の代表例といわれたときに思い浮かべる一番目のものに限定し、その名称を回答してもらった。

質問7), 8) では、回答者が今後幼児教育現場で働くにあたって、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みを行っていく姿勢について質問した。

質問9) では、虫を触ることの意識について、現在の状況を質問した。

Ⅲ 結果

1 「虫」について

虫についての調査結果について述べていく。

「1) 「虫」を15書いてください」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表1に示す。集計方法として、例えば、カブトムシ54の場合、62名中54名が記述していたことを表している。同様に虫の名称ごとの人数は、その虫を記述していた人数を表している。集計に当たっては、類似した記述は一つの一般的に代表されている名称にまとめてカウントすることとした。まとめた例としては以下のようなものがあげられる。①クワガタとクワガタムシの場合、クワガタとしてまとめた。②セミ、クマゼミ、アブラゼミのような場合(包含関係のある名称を述べていた場合、詳細名を含むそれらを代表する名称として)、セミ(セミの場合は「セミ科」でまとめることとした)としてまとめた。③クモ、セアカゴケグモのような場合も、セミと同様にそれらを代表する名称として、クモと

表1 「虫」の名称と記述した人数

カテゴリ	虫の名称	記述人数
昆虫	カブトムシ	54
	チョウ	49
	バッタ	47
	アリ	45
	カマキリ	44
	クワガタ	43
	カ	41
	テントウムシ	38
	ゴキブリ	37
	ガ	36
	ハチ	35
	セミ	33
	ハエ	29
	トンボ	21
	カメムシ	14
	コオロギ	14
	アメンボ	12
	カナブン	10
	スズムシ	10
	キリギリス	5
	アブ	4
	フンコロガシ	4
	ホタル	4
	カミキリムシ	3
	コガネムシ	3
	アブラムシ	2
	イナゴ	2
ハサミムシ	2	
幼虫等	ケムシ	20
	イモムシ	15
	ヨウチュウ	4
	シャクトリムシ	3
	アオムシ	2
	アカムシ	2
	ミノムシ	2
	ヤゴ	2
	アリジゴク	1
	ウジ	1
節足動物(昆虫除く)	ダンゴムシ	30
	クモ	24
	ムカデ	14
	ゲジゲジ	5
	ダニ	2
	フナムシ	1
	ヤスデ	1
節足動物以外・幼虫以外	ミミズ	19
	カタツムリ	3
	クマムシ	2
	ナメクジ	2
	ヒル	2
セキツイ動物	ゾウリムシ	1
	カエル	3
	トカゲ	2
	マムシ	1

記述人数1のもの:
オケラ, ガガンボ,
コメツクムシ,
コンチュウ,
タイコウチ, タガメ,
ナナフシ, ノミ,
マイマイカブリ,
マツムシ

表2 「虫」の代表例 (n=62)

カテゴリ	虫の名称	記述人数	小計
昆虫	カブトムシ	10	53
	チョウ	9	
	カ	8	
	アリ	8	
	ゴキブリ	7	
	ハチ	3	
	バッタ	2	
	ハエ	2	
	トンボ	1	
	テントウムシ	1	
	カメムシ	1	
クワガタ	1		
幼虫等	ケムシ	2	3
	イモムシ	1	
節足動物 (昆虫除く)	クモ	2	3
	ダンゴムシ	1	
節足動物以外 ・幼虫以外	ミミズ	1	1
	イルカ	1	
セキツイ動物	カエル	1	2

表3 「動物」の名称と記述した人数

カテゴリ	動物の名称	記述人数	カテゴリ	動物の名称	記述人数
	イヌ	54		ペンギン	11
	ネコ	54		トリ	7
	サル	44		ニワトリ	6
	ゾウ	44		アヒル	5
	ライオン	44	鳥類	インコ	4
	ウサギ	40		スズメ	4
	キリン	37		ダチョウ	4
	クマ	33		ハト	4
	ゴリラ	29		フラミンゴ	4
	トラ	29		ヒヨコ	3
	パンダ	26		カラス	2
	ウマ	22		フクロウ	2
	チンパンジー	17		以下記述人数1のもの	
	ハムスター	17		カモ, キウイ, キジ,	
	カバ	16	クジャク, タカ, ツバメ,		
	ウシ	15	ハクチョウ, ペリカン, ワシ		
	コアラ	15	ワニ	9	
	シマウマ	15	カメ	6	
	ネズミ	15	爬虫類	ヘビ	5
	リス	15	アナコンダ	1	
	サイ	14	コモドドラゴン	1	
	チーター	14	両生類	カエル	1
	キツネ	13	魚類	サメ	1
哺乳類	ブタ	13			
	オラウータン	10			
	カピバラ	10			
	カンガルー	10			
	タヌキ	10			
	ヒツジ	10			
	レッサーパンダ	10			
	ヒョウ	7			
	アルパカ	6			
	イノシシ	6			
シカ	6				
ヒト	6				
ホッキョクグマ	6				
ヤギ	6				
ラクダ	6				
クジラ	5				
モルモット	5				
アライグマ	4				
イルカ	4				
オオカミ	3				
ナマケモノ	3				
ハリネズミ	3				
アシカ	2				
アライクイ	2				
イタチ	2				
コウモリ	2				
フェレット	2				
ラッコ	2				
以下記述人数1のもの					
	ガラゴ, カワウソ, ジャガー,				
	スローロリス, ニホンザル,				
	ヌー, マントヒヒ,				

表4 「動物」の代表例 (n=62)

カテゴリ	虫の名称	記述人数	小計
	イヌ	37	
	ライオン	6	
	ヒト	4	
	サル	3	
	ネコ	3	
	ハムスター	2	
哺乳類	クマ	1	
	コアラ	1	
	コウモリ	1	
	ゴリラ	1	
	ゾウ	1	
	ブタ	1	
鳥類		0	0
爬虫類		0	0
両性類		0	0
魚類		0	0
無回答			1

してまとめた。ただしクモの場合は、「クモ目」でまとめることとなる。また、同じ人物が、アリとシロアリと記述していた場合は、2カウントとせず、1カウントとした。

今回の集計にあたり、記載された虫を一般的分類と考えられる以下の5つのカテゴリに分類整理した。1.昆虫, 2.幼虫等, 3.節足動物(昆虫除く), 4.節足動物以外・幼虫以外, 5.セキツイ動物。昆虫カテゴリに出現した虫の名称の数は39種類, いずれかの虫の名称を記述した人数は62人であった。同様に幼虫等は10種類32人, 節足動物(昆虫除く)は7種類47人, 節足動物以外・幼虫以外は6種類23人, セキツイ動物は3種類6人であった。記述された名称の総数は815個であった。それぞれのカテゴリごとでは, 昆虫カテゴリ651個, 79.9%, 幼虫等は52個, 6.4%, 節足動物(昆虫除く)は77個, 9.4%, 節足動物以外・幼虫以外は29個, 3.6%, セキツイ動物は6個, 0.7%であった。

次に「5) あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表2に示す。調査対象者62人から代表例として1つの名称が記述され, 総数は62個だった。昆虫として12種類の名称が記述され53個(85.3%), 幼虫等は2種類3個(4.8%), 節足動物(昆虫除く)も2種類3個(4.8%), 節足動物以外・幼虫以外は1種類1個(1.6%), セキツイ動物は2種類2個(3.2%)であった。

2 「動物」について

次に動物についての調査結果について述べていく。「2) 「動物」を15書いてください」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表3に示す。この「動物」の集計方法として, 「虫」と同様に, イヌ54の場合, 62名中54名が記述していたことを表している。同様に動物の名称ごとの人数は, その動物を記述していた

人数を表している。集計に当たって「虫」の時の違いは, 類似した記述の場合, それらを代表する名称にまとめてカウントするというところを行っていないことである。したがって, サル44とあるが, これは「サル」と記述したものだけをカウントしており, 「ニホンザル」の記述があっても別々のものとしてカウントしている。

まとめた例としては以下のようなものがあげられる。①トラとタイガーといった場合, トラとしてまとめた。同様な例としてワニとアリゲーター, パンダとオオクマネコがあげられる。②オラウータンとオランウータンは記述数の多かったオラウータンとしてまとめた。今回の集計にあたり, 記載された動物を以下の5つのカテゴリに分類整理した。1.哺乳類, 2.鳥類, 3.爬虫類, 4.両生類, 5.魚類。哺乳類カテゴリに出現した動物の名称の数は62種類, いずれかの動物の名称を記述した人数は62人であった。同様に鳥類は21種類36人, 爬虫類は5種類17人, 両生類は1種類1人, 魚類は1種類1人であった。

記述された名称の総数は883個であった。それぞれのカテゴリごとでは, 哺乳類カテゴリ794個, 89.9%, 鳥類は65個, 7.4%, 爬虫類は22個, 2.5%, 両生類は1個, 0.1%, 魚類は1個, 0.1%であった。

次に「6) あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表4に示す。調査対象者62人から無回答者1名を除き代表例として1つの名称が記述され, 総数は61個だった。哺乳類として12種類の名称が記述され61個(100.0%)。すなわち, 回答者全員が哺乳類のいずれかの動物名称を代表例に記述しており, 鳥類, 爬虫類, 両生類, 魚類の名称を代表例として記述した者は0人であった。

3 「虫」「動物」についての好き嫌いについて

「3) 虫は好きですか、嫌いですか」および「4) 動物は好きですか、嫌いですか」についての結果を図1および表5に示す。好きと回答した数値を1、嫌いと回答した数値を5としている。したがって、数値の大きいほうが嫌いということになっている。虫の好き嫌いの平均値は4.05であり、標準偏差は1.16であった。動物の好き嫌いの平均値は1.61であり、標準偏差は0.99であった。虫の好き嫌いとはほぼ逆転している結果となった。

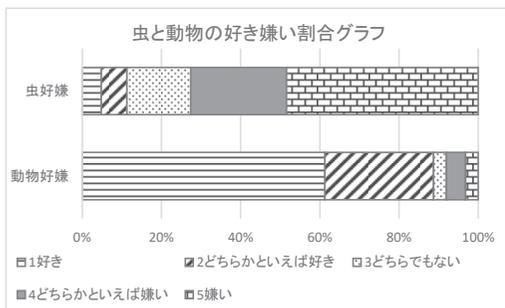


図1 虫と動物の好き嫌いの割合グラフ (n=62)

表5 虫と動物の好き嫌いの割合集計 (n=62)

	虫好嫌	動物好嫌
1好き	3	38
2どちらかといえば好き	4	17
3どちらでもない	10	2
4どちらかといえば嫌い	15	3
5嫌い	30	2
平均	4.05	1.61
標準偏差	1.16	0.99

4 就職後の意識について

次に、就職後の意識調査の結果について述べていく。「7) 学校園に就職後、自身の担当の教室で動物を飼うことについて」の結果を図2に示す。「8) 学校園に就職後、自身の授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行うことについて」の結果を図3に示す。

図2より、学校園就職後に自身の担当教室において動物を飼うであろうと回答した学生は

63%であった。34%は飼わないまたは飼わないだろうとしていた。理由に記入のあった内容を見てみると「世話をしている余裕がなさそう」といった余裕の無さ(6人)や「上手に育てられないから」といった自信の無さ(2人)があげられていた。

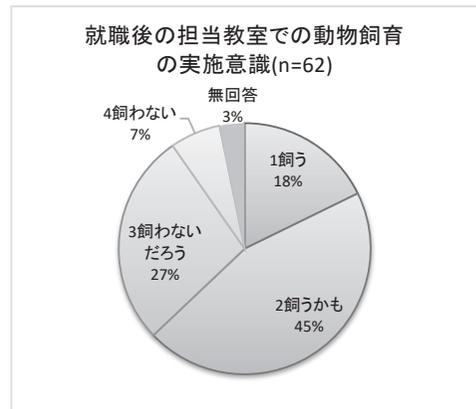


図2 就職後、自身の担当教室で動物を飼うかどうかについての意識調査 (n=62)

図3より、学校園に就職後、自身の授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行うかどうかについては、78%が行う方向性を示した。虫嫌いが多くにかかわらず、虫取りなどを行うことについて肯定的な回答が多かった。特に虫好きの3名および、どちらかといえば好き

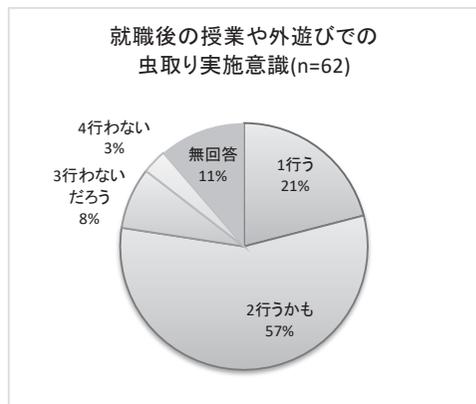


図3 学校園に就職後、自身の授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行うかどうかについての意識調査 (n=62)

の4名は虫取りを行う1を選択していた。虫嫌いを選択し、虫取りを行うの1を選択した2名が理由として挙げていることは、「自然と触れ合うことが大事だから」「虫は触れておいたほうがいい」であった。

5 現在, 虫を触ることについて

「9) 虫を今現在、触ることについての意識について」の結果を図4に示す。無回答6名であった。1.平気で触ることができる, 2.何とか触ることができる, 3.どちらでもない, 4.極力触りたくない, 5.絶対に触りたくないと回答したのは36名(無回答6名を除く56名での割合は64.3%)であった。

IV 考察

1 「虫」および「動物」としてイメージする範囲について

虫についてのイメージは表1および表2より、昆虫を主とした日ごろ身の回りに存在し、目にして小動物がそのほとんどを占めているが、ゾウリムシからマムシまでと広範囲に及ぶことが明らかとなった。また、虫の代表例として記述されたものも昆虫を主とする小動物で

あったが、カエルの記述もあり、小動物の捉えている範囲の違いが明らかとなった。代表例中にイルカという記述もあったが、同じ回答者の虫を15記述する中にイルカの記述がなかったため、今回の考察では虫の代表例から除外することとした。

一番多くの記述がなされたのがカブトムシ(54人), 2番目以降はチョウ(49人), バッタ(47人), アリ(45人), カマキリ(44人)であった。これらは、日ごろ目にする小動物であり昆虫である。昆虫以外では13番目にダンゴムシ(30人), 15番目にクモ(24人), 17番目にケムシ(20人), 18番目にミミズ(19人), 19番目にイモムシ(15人)と続く。ケムシやイモムシ, アオムシは昆虫の幼虫である。しかし、回答者には1つの虫として認識されていると考えられる。ヨウチュウと回答した者は4名おり、成虫とは別の虫として認識されているととらえることができる。しかし、このヨウチュウという回答は「幼虫」という大きなカテゴリを意味しており、先ほどのケムシ等とは異なっている。最小の生き物ではゾウリムシが1人に記述されている。脊椎動物では、カエル(3人), トカゲ(2人), マムシ(1人)となっており、これらを虫と認識している場合のあることが判明した。

カテゴリごとの回答者数を見てみると(表

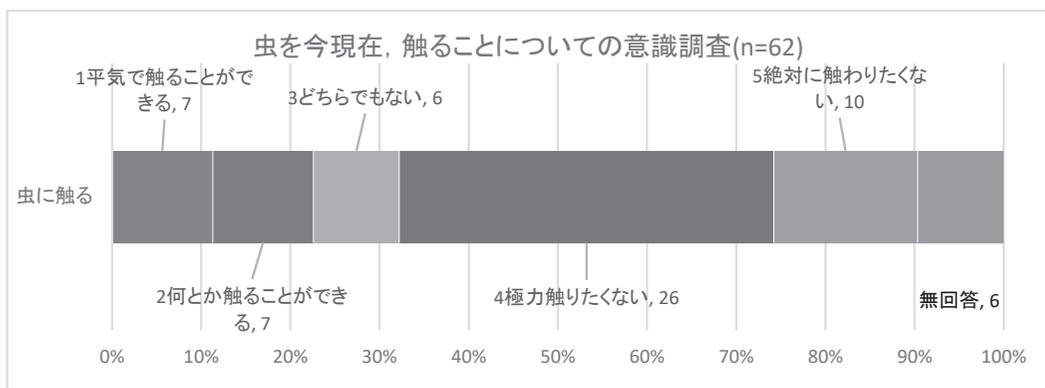


図 4 虫を今現在, 触(さわ)ることについての意識調査(n=62)

6) 昆虫のカテゴリのみを回答したのは4人、

表6 回答カテゴリ数(個)
と回答人数(人)

回答カテゴリ数	回答人数
1	4
2	21
3	25
4	11
5	1

2つのカテゴリを回答したのは21人であり、そのうちの15人は節足動物カテゴリを回答しており、残る6人は幼虫カテゴリを回答していた。3つのカテゴリを回答したのは25人であった。これらからも、虫の認識が複数のカテゴリにまたがる範囲であることが判明した。

以上より「虫」という用語は日常用語として用いられており、人によってその範囲には多少の違いがあることがデータとして明らかとなった。その範囲のほとんどが小動物であるがゾウリムシやカエル、トカゲ、マムシといったものまで含む場合もあることが明らかとなった。

動物についてのイメージは表3および表4より、哺乳類を主とした日ごろ身の回りに存在し、ペットや動物園、映像等で目にしているものがそのほとんどを占めている。ペンギンをはじめとする鳥類、ワニなどの爬虫類、カエルやサメといった両生類や魚類も記述されているが、無脊椎動物は記述されておらず、動物の範囲としてとらえられているのは、脊椎動物であることが明らかとなった。

イヌ(54人)、ネコ(54人)が一番多く記述されておりペット等、日常よく目にしている動物であると考えられる。動物の代表例はイヌ(37人)であり、ネコ(3人)を代表例に挙げる人数は圧倒的に少ない。ペット以外で記述された動物名は主に動物園にいるものである。鳥類の中に、トリと記述したのが7名おり、トリを動物名称と認識していることが明らかとなった。なお、トリと記述した7名中2名が他の鳥

類(フクロウ、ペンギン)を記載していた。

以上より「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。これらのことは、幼児教育を担う人材が動物=哺乳類という認識を持っていることであり、偏った動物概念や認識を無意識に園児たちに植え付けている要因となっている可能性がある。

2 「虫」「動物」について就職後の意識について

虫の好き嫌いと動物の好き嫌いについては(表7)、どちらも好きな傾向を回答した人数が6人と少なく、どちらも嫌いな傾向を回答した人数も4人と少ない。虫の好き嫌いとはほぼ逆転している結果であり、動物好きが圧倒的に多く、虫嫌いが圧倒的に多い現状がうかがえる。

動物好きが多い中、就職後の動物飼育の実施意識については(表8)、必ずしも動物好きだからといって動物飼育を行おうとする意識を持っているとは限らないことが推察される。

虫の好き嫌いとは就職後の授業や外遊びでの虫取り等を行うかどうか(表9)から、現在虫が嫌い傾向にあっても、虫取りを行っていかうという意識を持っていることがうかがえる。

虫の好き嫌いとは虫を触ることの意識について(表10)から、虫を触りたくない傾向のほとんど(40人中34人)が虫嫌い傾向である。しかし、虫を触ることの意識と就職後の授業や外遊びでの虫取りを実施していくかという意識では(表11)、触りたくない傾向のほとんどが(35人中29人)就職後には子どもたちとともに虫取りを行っていかうという意識を持っていることを見て取ることができる。

以上より、幼稚園教諭・保育士志望学生において、動物については好きな傾向を示すものが

多く、虫については嫌いな傾向を示すものが多く、虫に触れることを避ける傾向があることが明らかとなった。これらの現状ではあるが、就職後は動物を飼育してみたり、虫取りを子ども

たちと行ってみたりといった体験活動について、一定の実施意欲を保持していることが明らかとなった。

表 7 虫の好き嫌いとお動物の好き嫌いのクロス集計 (n=62)

		動物好き嫌い				
		1.好き	2.どちらかといえば好き	3.どちらでもない	4.どちらかといえば嫌い	5.嫌い
虫好き嫌い	1.好き	2	0	0	0	1
	2.どちらかといえば好き	3	1	0	0	0
	3.どちらでもない	5	4	1	0	0
	4.どちらかといえば嫌い	9	6	0	0	0
	5.嫌い	19	6	1	3	1

表 8 動物の好き嫌いとお就職後の担当教室での動物飼育の実施意識とのクロス集計 (n=62)

		自身の担当教室で動物を飼うかどうか				
		1.飼う	2.飼うかも	3.飼わないだろう	4.飼わない	無回答
動物好き嫌い	1.好き	11	20	6	0	1
	2.どちらかといえば好き	0	8	8	1	0
	3.どちらでもない	0	0	2	0	0
	4.どちらかといえば嫌い	0	0	1	1	1
	5.嫌い	0	0	0	2	0

表 9 虫の好き嫌いとお就職後の授業や外遊びでの虫取り実施意識とのクロス集計 (n=62)

		子どもたちとともに虫取りなどを行うかどうか				
		1.行う	2.行うかも	3.行わないだろう	4.行わない	無回答
虫好き嫌い	1.好き	2	1	0	0	0
	2.どちらかといえば好き	2	2	0	0	0
	3.どちらでもない	2	6	0	0	2
	4.どちらかといえば嫌い	5	7	1	0	2
	5.嫌い	2	19	4	2	3

表 10 虫の好き嫌いとお虫に触ることの意識とのクロス集計 (n=62)

		虫を今現在、触(さわ)ることについての意識					無回答
		1.平気で触ることができる	2.何とか触ることができる	3.どちらでもない	4.極力触りたくない	5.絶対に触りたくない	
虫好き嫌い	1.好き	3	0	0	0	0	0
	2.どちらかといえば好き	2	2	0	0	0	0
	3.どちらでもない	2	2	3	1	1	1
	4.どちらかといえば嫌い	0	3	1	9	0	2
	5.嫌い	0	0	2	16	9	3

表 11 虫に触ることの意識とお就職後の授業や外遊びでの虫取り実施意識とのクロス集計 (n=62)

		子どもたちとともに虫取りなどを行うかどうか				
		1.行う	2.行うかも	3.行わないだろう	4.行わない	無回答
虫に触ること	1.平気で触ることができる	5	2	0	0	0
	2.何とか触ることができる	3	4	0	0	0
	3.どちらでもない	1	3	1	0	1
	4.極力触りたくない	4	18	3	0	1
	5.絶対に触りたくない	0	7	1	2	0
無回答	0	1	0	0	5	

V まとめと今後の課題

本研究では、以下の2点を目的としてきた。1点目は、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、これらの学生が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることである。2点目は、就職後に子どもたちに提供しようとする動物関連の活動の意欲について明らかにすることである。

今回の調査研究により、「虫」という用語は日常用語として用いられており、虫のイメージは、86.3%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物(9.4%)や節足動物以外(3.6%)、まれに脊椎動物の一部(0.7%)が含まれることが明らかとなった。また、「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。その動物のイメージは、哺乳類が89.9%とほとんどであり、続く鳥類は7.4%であることが明らかとなった。

また、虫嫌いの学生が多くいる現状の中、幼児教育現場で働くにあたって、虫や動物の好き嫌いにかかわらず、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みを行っていく意識のあることが明らかとなった。

今回は、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象としていた。今後は、初等中等教育の教員志望学生や現職教員が「虫」や「動物」についてどのような意識を持っているのかを明らかにしていくためにも調査の対象を広げていく必要がある。調査の具体的対象としては小学校教員志望学生や中学校・高等学校理科教員志望学生である。さらに、学生のみならず、現職の教員すなわち幼稚園教諭、保育士、小学校教員を調査対象としていく。また、幼稚園や保育所での虫や動物に関連した取り組みの実態と幼稚園教諭、保育士の「虫」や「動物」に関する意識との関連、

小学校での教科や領域の指導における虫や動物に関連した取り組みの実態と小学校教員の「虫」や「動物」に関する意識との関連をより詳しく調査していくことも今後の研究課題としたい。

VI 謝辞

質問紙調査に協力してくれた学生諸君、データ入力を補助してくれたゼミ生諸君に感謝します。また、本研究はJSPS科研費15K04462の一部を用いて実施されました。

引用文献

- 藤田絢, 川上紳一, 東條文治, 神野愛, 片田誠, 大門佳孝「小学生を対象にした昆虫に関するアンケート調査と小学3年「昆虫を調べよう」における指導上の留意点に関する考察」岐阜大学教育学部研究報告, 自然科学 31, 57-62, 2007
- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか? - 虫嫌いに関する親子の関連性 -」日本科学教育学会研究会研究報告 19(2), 57-62, 2004
- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか? - 子どもの虫嫌いに与える親の影響 -」日本理科教育学会九州支部研究紀要 (33), M1-M7, 2005
- 木村紗帆, 野崎健太郎「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識 - 虫嫌いの仕組み -」椋山女学園大学教育学部紀要 9, 109-119, 2016
- 厚生労働省「保育所保育指針解説書」2008
- 栗原泰子, 野尻裕子「保育者養成学生の動物との関わりについて - 動物への対応と幼児への援助について -」川村学園女子大学研究紀要 19(2), 27-38, 2008
- 久留飛克明「大阪府下の小学生の昆虫意識について」昆虫園研究 5, 36-39, 2004
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説理科編」2008
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」2008
- 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説」2014
- 中村陽一, 渡邊ユカリ, 遠藤翠「幼稚園における飼育の実態に関する研究」日本保育学会大会発表論

- 文集 (55), 440-441, 2002
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察(1)－」日本保育学会大会研究論文集 (49), 64-65, 1996
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察(2)－」日本保育学会大会研究論文集 (50), 692-693, 1997
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察(3)－」日本保育学会大会研究論文集 (51), 302-303, 1998
- 佐伯英人「児童・生徒の昆虫に対する意識」山口大学教育学部研究論叢 (第3部: 芸術・体育・教育・心理) 58, 67-73, 2008
- 田中悠樹「教員志望学生の虫に対する嫌悪感情について－虫嫌いの自然体験活動に対する意識への影響－」日本理科教育学会全国大会要項 (65), 163, 2015
- 山下久美, 首藤敏元「幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望－子どものムシとの関わりに関する研究に注目して－」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 (4), 177-188, 2005

(ひらた とよせい 教育学部教育学科)

(おがわ ひろし 京都ノートルダム女子大学)